https://printo.it/pediatric-rheumatology/JP/intro

# 全身性エリテマトーデス

版 2016

### 5. 付録2. 新生児ループス

新生児ループスは、胎児や新生児における稀な病気で、母親の特異的自己抗体が胎盤を介して赤ちゃんに移行して起こる病気です。新生児ループスにかかわっている特異的自己抗体は、抗SS-A/Ro抗体と抗SS-B/La抗体です。これらの抗体はSLEの1/3にみられますが、これらの抗体を持つ母親から生まれた新生児の多くは新生児ループスにはなりません。一方で、SLEではない母親から新生児ループスの子どもが生まれることもあります。
新生児ループスは、SLEとは異なります。ほとんどの症例において、新生児ループスの症状は生後3〜6か月までしかみられず、後遺症も残しません。もっとも多い症状は皮疹で、生後2、3日目から数週間にかけて、特に日光に当たった後に出現します。新生児ループスの皮疹は、一過性で痕を残さずに治ります。次に多い所見は血球数の異常ですが、重篤になることは稀で、無治療で数週間後には消失します。
ごく稀に、先天性心ブロックという不整脈が起こることがあります。赤ちゃんの脈が異常に遅くなり、これは一生続きます。妊娠15〜25週の時に胎児心エコーによって診断されることがあり、出生前に胎内で治療できる場合もあります。出生後に多くはペースメーカーが必要になります。もし1人目の子どもに先天性心ブロックがあれば、2人目の子どもにも10〜15%の確率で同じことがおこります。
新生児ループスの子ども達は、正常に発育します。将来、SLEになる確率はほとんどありません。